

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二八二）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

「三好氏系図」から謎解き・新発見、そしてまた謎

——三好義継から広島藩士三好氏、岩倉城家老大島丹波から鳥取藩士大島氏——

びっくり、びっくり

人と人との出会いでびっくりすること、新しい知見を無知の知としてびっくり仰天することが今にも続く。まだ好奇・向上心があつて、何でもおもしろがる気力・体力・学力があるのだとにやにやする。異能集団と称する三好長慶会の夜六時から八時の研究例会に毎会に四〇人以上が出席してくれる。そこでびっくりの新情報が交換される。戦国三好一族、三好長慶の学術的大展開がびっくりするほどに



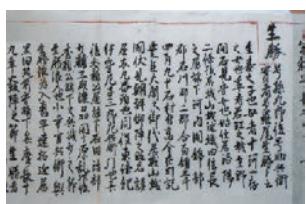
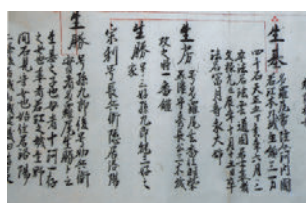
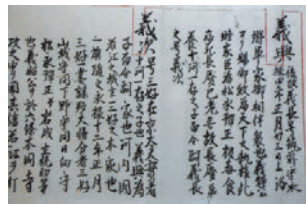
広島県立文書館の三好家文書展資料



ヤフーオークションで落札の三好氏系図



三好氏系図の部分



進んでいる。そのことを先月号に書いた。天野忠幸さんの精励による大展開の根源が二〇〇七年の第二二回国民文化祭での「戦国三好フェスティバル」のシンポ・講演会に招いての出会いであることが思い返され、それからまだ一〇年目である。三好長慶会々員が新陳代謝を繰り返しながら現会員が二三五名、その発足が一九九九年七月一二日の旗揚げ以来の十五年余の「いつもいつも信長・秀吉・家康でもあるまい。信長の直前二〇年の戦国天下人三好長慶

こそ見直されねばならない」の提唱が「そうだそうだ」と受け容れられている。「なぜ成る」の心意気を相互に認め合い、共生・共存・共栄・共栄の偉大さを共に確認されねばならない。さて、昨年の今頃に広島県立文書館で写真のように、

広島藩士三好氏の系譜

広島県立文書館での昨年の三月二七日～六月一三日の三好家文書展で三好長慶から信長・秀吉・浅野長勲の文書が公開された。その文書は平成三年に寄贈された江戸時代の文書二七点、平成二五年に親族からさら

島県立文書館に直行して配布資料・パンフを恵送してくれてびっくり。その直後に福山市の会員の三好貫之さんから「知っていますか」の連絡と資料のご恵送。三好義継からの広島藩士の三好氏の現在までの存続、それが伊吹島三好氏、山口・宇部市の三好氏とも関連し、さらには連載中の横田内膳正村詮と阿波岩倉城で双壁の家老であった大島丹波成がこの回に登場してくる。その謎、謎の謎解き新発見のびっくり仰天のことを記録する。

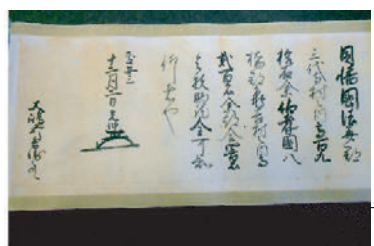
に中世文書を含む三三点が寄託されたものであった。そのことに、びっくりした後にお隣りの岡山県林原美術館の収蔵する石谷家文書の公開と『石谷家文書』將軍側近のみた戦国乱世の発刊に伴う徳島博物館での『中国国分／四国国分』秀吉の天下取りと智将・蜂須賀正勝展で当事者の内池英樹さんの講演でびっくり仰天したのであった。そしてまた「広島藩士三好家文書展」の文書の解読に天野忠幸さんが関わり、資料の執筆をされていた。そのことの出会いの不思議にびっくりしていたら、天野さんが広島藩士の三好氏伝来の「三好氏系図」によって記述していることを承知して、その存在を知ったのに、さらにびっくり、びっくりとしたのが、広島三好氏の「三好氏系図」と同根の「三好氏系図」を異能の東條英機さんがヤフーオークションで群馬県から出品されたものを落札して小生の手にさせ、その前の「三好長慶書状」の高額落札に続いてであっただけに、びっくり、びっくりとすることになった。

広島藩士三好氏が戦国天下人となった三好長慶・義

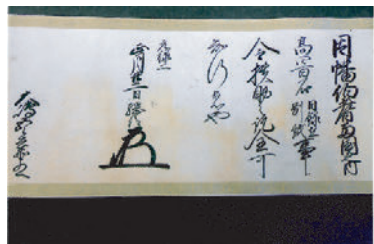
興の後を継いだ十河一存の嫡子からの三好義継が天正元（一五七三）年十一月の三好本宗家の断続に関わる事が証明される。三好義継が織田信忠勢に若江城を攻められて壮烈な妻子共々の自刃をして果てる原因が三家老の多羅尾常陸介生基・池田丹後・野間石見の若江三人衆の裏切りによるものであった。その多羅尾常陸介生基と三好義継と同腹での十河一存の娘のヲテイとの間の子が広島三好氏の元祖となる三好生勝の孫九郎・助兵衛である。この生勝が織田信長に三好義継の後の継承を認められ、河内の錦部郡・石川郡で五四九〇石を与えられ、秀吉の文禄の朝鮮出兵の時に肥前名護屋城の本丸番頭として阿波からの東條紀伊守と尼子三郎左衛門が同列となつて勤めた。その後豊臣秀頼の旗



阿波岩倉城の大島氏系図



大島氏の因幡・伯耆での知行宛行状



下となり関ヶ原合戦の時には石田三成に従い、合戦後の秀頼のリストラで浪人となり黒田官兵衛と入魂であったことから黒田筑前守長政の旗下となつていて、大坂冬の陣で活躍したが老齢を理由として天竜寺に隠居していたが、その子三人が浅野但馬守長晟と出雲国主池田備中守長吉にそれぞれが家臣として迎えられる。浅野長晟に黒田家と同じ三〇〇〇石を嫡男生勝が二〇〇〇石、他の二人が五〇〇石宛で召し抱えられ、以後に広島藩で重用されて存続し、三好家文書を保存して現在に至り「三好文書展」が昨年に開催されて、それをびっくりしたのである。

鳥取藩士大島氏のこと

広島藩士三好氏が三好義継から多羅尾氏との関係から成立するが、その三好氏

と不思議な関連を持ちながら鳥取藩士大島氏が存続する。その大島氏は横田村詮と共に阿波岩倉城の三好康長の下で家老であった大島丹波成成からのものである。その系図と宛行状を手にしながら、横田内膳正村詮の記述の最後にとしていたところが不思議の巡りあわせで今回の記述となる。

写真のように大島丹波成成に「阿波国岩倉西ノ城に住す。後に秀吉公四国表に御発向の節城明け渡し浪々す。後に石田治部少輔三成に仕え慶長式丁酉四月七日に卒す。寺は京都新黒谷金光明院、戒名雲出西住と号す。妻は三好備中守殿娘戒名花屋妙寿と号し安芸広島大島四郎左衛門宅にて死す。寺は金龍寺」と記録される。成成の弟の定保には「石田三成に仕え関ヶ原一戦の前に岐阜へ加勢、その後澤山

の城にて自害す」。定保の子の定貴・定久には「浅野紀伊守様に仕え今に家存続す」右兩人共浅野紀伊守殿に仕え今に家有り」と記録される。そして成成の嫡男の興成（利忠）、四郎左衛門には「幼少の時阿波国にて和談の人質として長宗我部土佐守殿手前へ居住す。以後本国にて生駒讃州に仕え後に浅野紀伊守殿に仕え今に家有り」とされる。

このように広島藩士三好氏と阿波岩倉城家老の大島丹波からの鳥取藩士の大島氏は関連して広島藩士三好氏は三好長慶以来の威勢を背景として重用されて、江戸時代に生き貴重な三好家文書を保存して現代に公開される。

鳥取藩士の大島氏は石田三成から池田輝政・忠継・忠雄・光仲・綱清…と継承される池田氏に仕えて播州姫路から備中岡山へ、そして因幡の鳥取に転住して藩の御用人として重用される。それが伯耆米子藩の中村氏の家老として米子城築城とその城下の街作りに大活躍しながら中村一氏の後を継いだ藩主中村忠一に慶長八年に「上意討ち」された横田内膳正村詮の壮絶な

最期の後の時代に歴代が大島四郎兵衛を名乗り、慶長の九年の輝政・慶長十八年の忠継、元和五年の忠長からの宛行状から写真のように慶安三年の池田光仲からの因幡国法美郡三代寺村（岩美郡国府町）、伯耆国八橋郡亀谷村（東伯郡北栄町）での宛行状、元禄二年の池田綱清の因幡伯耆両国内の知行宛行状から享保・明和・寛政・文化・天保の歴代鳥取藩主池田氏からの宛行状が現存されている。

各地の「三好氏系図」の再見

一次史料で学術的な大展開と共にそれぞれの在地の二次史料と各家の系図によって証明される全国各地の三好氏の系譜・由縁が、謎解きと新発見をさせるだけでなく、さらにまた謎の謎を発生させる。これまでに目にして来た系図と位牌・墓碑と伝家の宝物・伝承の四点セットでの再評価をして来たが、そのことが求められることになっている。さてもさても身近な故郷の歴史の再認識・再検討が切実に求められていることに異能の同志が共に努力しなければならぬのである。